

発表題目
目的意味論の擁護と因果説批判

氏名 竹下至 (TAKESHITA Itaru)

所属 中京大学

本文

本発表では、心的表象の理論としてミリカン流の目的意味論を支持する議論を行う。内容は大きく分けて、(1) 目的意味論に対してなされた批判への応答と (2) 因果説への批判の 2 点である。

(1) フォーダーは、自然選択は外延的に働くことに注目し、共外延的な内容の候補があった場合、目的論的な理論は決定不全に陥ると論じた。例えば小さくて黒い動体に反応して舌を出すカエルはそうすることでハエを捕食する。彼によれば、もしこのカエルの住む環境において小さくて黒い動体とハエが共外延的であったなら、カエルの表象としていずれを内容として帰属すべきかは目的意味論によっては決定できない。さらに（あるいはそれゆえに）、環境が変化してハエの他にも小さくて黒い動体が飛び交うようになった場合にカエルがそれに反応しても、これを誤表象と見なすことはできない、と言われる。これに対して私は、この決定不全性は表象の意味論に求められる客観性を損なわないということと、フォーダーの示す例の後半においてカエルの子孫はハエ表象を獲得し誤表象も可能になると論じる。

(2) また、因果的理論として括られるアプローチに対して（フォーダーの非対称的依存理論を中心に）、それが、表象の理論が説明すべきとされる事柄—すなわち志向性—を説明できていないと批判した上で、目的意味論はまさにその説明を与えるものであると論じる。